

卒業論文  
子どもの貧困と集団不適応に関する  
支援者の意識分析  
——家庭・親へのまなざしを中心に——

2013 年度入学

九州大学 文学部 人文学科 人間科学コース  
社会学・地域福祉社会学専門分野

## 要 約

本稿では、子どもの集団不適応問題と貧困問題について、支援者の意識を中心に量的調査を行った。子どもの集団不適応問題は、未成年者の非行問題・不登校問題・引きこもり問題を、「集団（社会）に適応できていない状態」という共通点からグループ化して定義したものである。また支援者は、現在職業やボランティア活動で集団不適応問題の解決に、直接的・間接的（ボランティア活動の運営等）に取り組んでいる人々を指す。子どもの集団不適応問題の現状は、非行は減少傾向、不登校児童生徒数は増加傾向、引きこもりは相当数存在することが推測されている。また、現代日本における子どもの貧困問題の深刻化を相対的貧困率の悪化から説明し、子どもの貧困と集団不適応問題が関係を持つことを、非行・不登校では直接先行研究から、引きこもりについては直接その関係を指摘した研究は存在しないものの、その関係性を示唆する研究から示唆した。また、子どもの貧困と集団不適応問題を結びつける根底には、社会システムの転換による希望の喪失と消費社会の中での物質的欠乏がもたらす「無気力」が影響を及ぼしていることを述べた。そして、日本社会が子どもの集団不適応問題を家族問題に包摂し、その原因・解決を家庭・親へ求める傾向にあることを加藤の『不登校のポリティクス』を引いて説明した。ここから、支援者が子どもの集団不適応問題の原因を家庭・親に求めている場合、生活苦にある家庭と支援者間で対立関係が生じ、適切な支援を行えないのではないかという疑問が生じた。実際に、先行研究を引くと、家庭・親の協力が十分に受けられる事を前提とした解決策を提示したものや、親の教育方針により受ける子どもの不利益を誇張して論じているものが存在し、このようなまなざしを家庭・親に向けて支援を行うことで、経済的余裕が無い家庭を追い詰めるような結果を生むのではという懸念があった。さらに、筆者がボランティアで支援者と関わりを持った際に、「親こそ育て直しが必要」等の家庭・親に集団不適応問題の原因を帰責する声を聴いた経験が多かった事から、それらの点を問題意識とし、以下の3つの仮説設定を行った。

- ①「支援者において子どもの集団不適応問題に帰責されているのは家庭・親である。」
- ②「子どもの貧困問題は集団不適応問題の背景にある場合も支援者の意識にのぼりにくい。」
- ③「社会構造・制度よりも家庭・親が子どもの貧困問題においても帰責される傾向がある。」

これらの仮説の検証のため、支援者・非支援者に対し調査票を利用した意識調査を行った。調査は支援者・非支援者（子どもの集団不適応問題の支援経験のない人）を対象にし、2016年の10～11月に、Webを用いて行った。調査回収数は支援者：97票＝有効50票＋無効

47 票、非支援者：190 票＝有効 129 票＋無効 61 票であった。ここで得られた結果を、単純集計と相関分析を利用して分析を行った。その結果、仮説①の、支援者が非支援者よりも家庭・親に帰責する傾向があるという部分は、非支援者の方が「親の教育方針」を子どもの集団不適應問題の原因の 5 段階評価で高く評価する傾向があったことにより反証された。また、支援者・非支援者を問わず子どもの貧困問題の認知度は 9 割以上であり、また子どもの集団不適應問題の支援者が貧困状態にある子どもに接した経験も非支援者の 1.5 倍以上であったことから、仮説②も否定された。さらに子どもの貧困問題の原因意識を家庭内・家庭外に分けて分析を行ったところ、家庭内に原因を求める傾向が支援者・非支援者双方に見て取られ、支援者が特別家庭内に原因を求める傾向にあるわけではなかった。以上を踏まえて本調査の内容を 2 点に総括すると、1 つが子どもの集団不適應問題において、家庭・親に対する評価は支援者・非支援者で顕著な差は見られず傾向が似通っている事と、もう 1 つが家庭・親に帰責する傾向が支援者・非支援者を問わず、集団不適應問題・子どもの貧困問題両方に見られた事にまとめることができる。本稿では、家庭・親に原因・解決を求める傾向は未だに存在することが明らかとなったものの、一方で子どもの貧困問題への全体的な認知度が高まり、地域社会のつながりを大事にする支援者の傾向も見て取られた事から、これからは、支援の前線にいる支援者から支援者家庭の限界を理解していくことにより、家庭も対象とした包括的な支援が推進される可能性を指摘した。以上のような意識変化により、子どもの集団不適應問題の原因・対策を家庭内に求める事による家庭と支援者、または家族員同士の対立関係が解消され、より効果的な支援が行われるようになることが、現代日本の子どもの集団不適應問題の解決に求められている。

キーワード：子どもの貧困 集団不適應問題 意識 家庭・親

## 目 次

1	子どもの貧困と集団不適應問題の現状	1
1.1	子どもの集団不適應問題	1
1.2	子どもの集団不適應問題の現状	2
1.2.1	非行の現状	
1.2.2	不登校の現状	
1.2.3	引きこもりの現状	
1.2.4	集団不適應問題の現状総括	
1.3	子どもの貧困問題	5
1.3.1	日本の子どもの貧困の現状と背景	
2	子どもの貧困と集団不適應問題の関係——先行研究より	8
2.1	子どもの貧困と集団不適應問題の関係	8
2.1.1	子どもの貧困と非行問題	
2.1.2	子どもの貧困と不登校	
2.1.3	子どもの貧困とひきこもり	
2.2	無気力と貧困	20
2.2.1	無気力と貧困——家庭による希望の継承から	
2.2.2	無気力と貧困——物質的欠乏が子どもの内面にもたらすもの	
2.3	子どもの集団不適應問題と家庭——不登校を例にとって	27
2.4	貧困を起因とする集団不適應問題と家族問題	30
3	支援者の意識調査設計	36
3.1	支援者の意識に関する調査の設計	36
3.1.1	問題の所在	
3.2	仮説設定	37
3.2.1	仮説設定の詳細	
3.2.2	問題設定の意義	
3.3	調査の設計	40

3.3.1	調査の目的と設問の柱立て	
3.3.2	調査関連期間	
3.3.3	調査方法	
3.3.4	母集団と対象者	
3.3.5	調査回収数・回収率	
3.3.6	調査の限界	
4	設問毎の調査分析	42
4.1	調査対象者の属性についての分析	42
4.1.1	調査対象者の年齢	
4.1.2	調査対象者の性別	
4.1.3	調査対象者の職業状況	
4.1.4	調査対象者の結婚経験・子どもの有無	
4.1.5	調査対象者の最終学歴（見込み含む）	
4.1.6	支援者の集団不適合問題対処経験	
4.1.7	支援者の援助形態	
4.1.8	調査対象者の属性総括	
4.2	子どもの集団不適合問題に関する意識	49
4.2.1	集団不適合問題の原因についての意識	
4.2.2	子どもの集団不適合問題の解決に重要な役割を果たす人	
4.2.3	集団不適合問題の原因と解決の役割についての意識総括	
4.3	子どもの貧困に対する意識分析	66
4.3.1	日本における子どもの貧困の存在	
4.3.2	子どもの貧困問題に接した経験	
4.3.3	子どもの貧困問題の原因についての認識	
4.3.4	子どもの貧困に関する認知度と経験、原因意識総括	
5	仮説の検証	72
5.1	仮説毎の検証	72
5.1.1	仮説①についての分析	

5.1.2	仮説②についての分析	
5.1.3	仮説③についての分析	
5.2	仮説分析総括	74
6	おわりに	75
	[注]	76
	[文献]	77
	[付録]	80